

Congratulazioni!!

ムジカヴィータ・イタリアが日本で創刊されたことに対し、来日アーティストなどから、本誌と読者へのメッセージを頂いた。ここではその一部を紹介する。なお本誌 WEB サイトでは、これらのアーティストのメッセージ動画もご覧頂けるので、ぜひアクセスして欲しい (<http://www.musicavitaitalia.com/>)。

創刊
おめでとう
コメント

Area アレア

僕らは今夜のコンサートを、この美しい雑誌ムジカヴィータ・イタリア、そして全ての日本人に捧げたいと思う。パオロ・トーフアニ、パトリツィオ・フォリセッリ、アレス・タヴォラッツィだよ、チャオ、そしてありがとう！



Alberto Radius/Formula3 アルベルト・ラディウス/フォルムラ・トレ

僕はアルベルト・ラディウス。僕は今、ムジカヴィータ・イタリア誌と共にいる。僕はこの雑誌が好きだよ。なぜなら2人のジャーナリストに出会い、僕にたくさんの興味深い質問をしてくれたから。そしていかに未来を良くするかという答えを僕は探し出したんだ。きみたちにとって良い年である事を祈っているよ。日本に大きな幸運を！そしてこの後すぐに起こる事(注：ライブ本番のこと)に大きな幸運を！また来年このスペクタクルで会えればと思うよ。今回は物語の第1話さ。第2話はまた来年ということで！ チャオ！

Museo Rosenbach ムゼオ・ローゼンバッハ



チャオ、皆さん！僕らはムゼオ・ローゼンバッハのアルベルト、ステファノ、ジャンカルロで、他のメンバーは今リハーサルをしているよ。ムジカヴィータ・イタリア誌の全ての友人たちに挨拶するよ。このとっても素敵な雑誌はイタリア音楽を掲載しているんだよ。チャオ、皆さん！(日本語で)ありがとう、どうもありがとう！

Rovescio Della Medaglia ロヴェッショ・デッラ・メダーリャ



ムジカヴィータ・イタリアの読者の皆様に。イタリア音楽への貢献、そしてロヴェッショ・デッラ・メダーリャへの応援をありがとう。あなたたち日本人のために演奏できて、そして今夜、この偉大な雑誌の2人と知り合えてとっても嬉しかったよ。ダニエレ・ポーモとエンツォ・ヴィータ、RDMことロヴェッショ・デッラ・メダーリャより。ありがとう、また会いましょう！

Maxophone マクソフォエネ



全ての僕らのファンとムジカヴィータ・イタリアの読者の皆さんへ。ありがとう！そしてイタリア音楽とマクソフォエネのプログレを追い続けてくれることを祈ります。ありがとう、チャオ！

Mario Maglione マリオ・マリオエネ



ムジカヴィータ・イタリアの読者の皆さんへ、強い抱擁を贈ります。特に日本の読者の皆さんへ。音楽は人生 (La Musica è vita)、そして日本は人生 (Il Giappone è vita)。(日本語で) ありがとう。

Stefano Bollani ステファノ・ボラーニ



ムジカヴィータ・イタリアの読者の皆さんへ、イタリア音楽を聴き続けるべきだよ、とってもいいものだから。チャオ！

Zephiro ゼーフィロ



信じられないぜ！日本語で書かれたイタリア音楽雑誌が出たんだ！君たちに自信を持って奨めるよ！

ゼーフィロ 2013年ジャパン・ツアー・レビュー

(2013年3/29～4/10)

ライブ・レポート：磐佐良雄

Zephiro La tournée in Giappone



写真提供 / 佐藤顕子

2009年に初来日公演を行い、翌2010年に3ヶ月に渡ってジャパン・ツアーを行ったロック・バンド、ゼーフィロ(Zephiro)が、3回目のジャパン・ツアーを敢行し、東京都内と横浜で計9回のギグを行った。

2002年にバンド・リーダーのクラウディオ・トデスコが中心となって結成したローマのバンドで、イタリア語のZephiro(意:春風)を綴り変えたZephiro(ゼーフィロ)をバンド名としている。結成以来10年間で300本のライブ活動を行った実績を持つライブ・バンドであり、2006年にはアルバム『Immagina un giorno(意:ある日を夢見る)』を発表。同アルバムに収録されている「Lontano da un luogo lontano(遠くから遠くへ)」ではイタリアでインディーズ・ミュージックのコンクールで賞にも輝いている。

初来日は2009年。東京で6回のライブを行い、確かな感触を得て、翌2010年には東京を中心に37本のライブ・ツアーを敢行。前出の代表曲「Lontano da un luogo lontano」の日本語版「太陽のある場所」を発表。2011年のニューヨーク・ツアーを挟み、2012年に5曲入りのミニ・アルバム『Kawaita me(かわいた目)』を発売。5曲中2曲を日本語で歌っている。「かわいた目・Kawaita me」「影・Kage」そして今回、新メ



ンバーで2013年のジャパン・ツアーを敢行した。

現在のメンバーは：

クラウディオ・トデスコ
(Claudio Todesco/Gt,Cho)

クラウディオ・デジデーリ
(Claudio Desideri/Vo,B)

レオナルド・センチネリ
(Leonardo Sentinelli/Ds)



左からクラウディオ・トデスコ、レオナルド・センチネリ、クラウディオ・デジデーリ

イタリアのバンドの誇りにかけて、イタリア語で歌うことにこだわり、ウェーヴ・ロックやポスト・パンクを基調としながら、ポップスやプログレの要素も取り入れたサウンドに乗せて、イタリア語でメロディアスな旋律をしっかりと歌う、オルタナ系ロック・バンドという基本骨子。

2010年頃からトデスコがギターにビルトインして使い始めたコルグのカオスパッドだが、今回はデジデーリもベースにカオシレーターを搭載。レオナルドもウェーヴ・ドラムを使う事もあると言う。完全な3ピースのギター・バンドながら、これらカオスパッドを駆使した異色奏法が加わり、独自のデジタル・ロックと呼べるサウンドに大きく飛躍を遂げていたのが特筆するところである。



カオスパッド、カオシレーターを駆使した独自のサウンド

日本でのライブを重ねて、しっかりと固定ファンも付いて来たゼーフィロ。さらなる来日と今後の活躍がますます楽しみだ。

トウキョウ・ヴィエール・アンサンブル 『ミモザの日』レビュー

(2013年3月8日)

Tokyo Vielle Ensemble

ライブ・レポート：磐佐良雄

PHOTO by : Yuki Kuroyanagi



今やイタリアン・ロックの聖地と化しつつあるクラブチッタ(神奈川県川崎市)に於いて、2013年3月8日、《ミモザの日/オーケストラによるイタリア音楽の夕べ》というタイトルを冠したトウキョウ・ヴィエール・アンサンブルのコンサートが開催された。

日本のイタリアン・プログレッシヴ・ロック・ファンなら、トウキョウ・ヴィエールと聞いて、ピンとくる方も多いだろう。そう、2006年に奇蹟の初来日公演を遂げたニュー・トルルスの名作『コンチェルト・グロッソ』のオーケストラ・パートを担当した弦楽合奏団だ。もちろん翌2007年にも再来日したニュー・トルルスの新作『コンチェルト・グロッソ/ザ・セヴン・シーズズ』の初披露の際もこのヴィエールが務めている。

そのトウキョウ・ヴィエール・アンサンブルが、女性だけの特別な編成で3月8日のミモザの日を記念したクラシック・コンサートを行った。クラシック編成ではあるものの、クラシック音楽だけに限らず、映画音楽、そしてイタリアン・プログレもレパートリーとして披露するという、あらゆるイタリア音

楽ファンにとって、食指が動かされるコンサートとなった。

実際にヴィヴァルディの「四季」から、「ニュー・シネマ・パラダイス」のせつない調べ、そしてニュー・トルルスの「コンチェルト・グロッソ」など、実に幅広いジャンルの音楽を優雅に、時折情熱的に披露してくれた。またメイン舞台に配置したオーケストラの演奏の他に、2ヶ所のアディショナル・ステージが生まれ、ピアノ・ソロのミキ・サカタ、トリオ編成のデュアリスのスペシャル・ステージなど、ヴァリエーションに富んだスペクタクルとなった。このデュアリスは3人組で、ヴァイオリン、ソプラノ、ヴィブラフォン、ピアノ、パーカッションの5パートをこなす興味深いパフォーマンスを見せてくれた。

また客席もプログレのコンサート等でお馴染みの映画館タイプの座席構成ではなく、全体的にゆったりとしたスペースを取り、随所にテーブルとキャンドルライトを置いた、ムードある雰囲気を出しており、ワイン・サービスなども施され、女性の日ながら、性別に関係なく、リラックスしたロマンティックな



雰囲気の中で、イタリアのあらゆる音楽に包まれたのは、来場者にとって幸せな体験となった。

なお、トウキョウ・ヴィエール・アンサンブルは1995年に若く才能あふれる演奏家たちによって設立された弦楽合奏団で、弦楽器のために作曲された楽曲の研究・演奏を軸として活動を続けて来ているようだ。ヴィエール(Vielle)とは中世フィドルのことで、後のヴィオール属やヴァイオリン属の祖先となった楽器群のことのようだ。なるほど、古きを訪ねて新しきを知る、という精神のオーケストラであることが感じられ、今後のますますの活躍を期待したい。

[Tokyo Vielle Ensemble : Set List]

1. ヴェルディ：歌劇『椿姫』より
2. デュアリス/オー・ソレ・ミオ〜フィガロの結婚〜タイム・トゥ・セイ・グッバイ
3. ヴィヴァルディ：春
4. デュアリス/ゴッド・ファーザー〜誰も寝てはならぬ〜チャルダッシュ
5. マーラー：映画『ベニスに死す』より
6. マンシーニ：映画『ひまわり』より
7. モリコーネ：映画『海の上のピアニスト』より
8. モリコーネ：映画『ニュー・シネマ・パラダイス』より
9. モーメント・ストリング・カルテット / PFM：原始への回帰
10. モーメント・ストリング・カルテット / マウロ・パガーニ：木々は歌う
11. ニュー・トルルス：コンチェルト・グロッソ1
12. 全員 / タイム・トゥ・セイ・グッバイ